

かの英榮號に乗つて岸近き海に出た。沖のわなたに漁り火遠く、近き山々は静に立ち、月は山の端を今しも上る。様々の唱歌をのせて舟は浪のまにまに漂うて見たり、漕ぎ廻つて見たりする。此邊の漁夫が常に舟を進むる時にするかけ聲をまねてヤツチンヨ〜ヤツチン〜ヤツチンヨと大小五人が調子に乗つてかけ聲する。忽ち清子が八千代に連想して「キミガヨーハ」とうたひ出した。即ち一同正座して沖に面して謹でうたつた。月夜、海上、小舟中の小さい人の聖代の頌、遠近の山にいかにかひいたか。

禁煙のすゝめ

東 基 吉

本誌の讀者は悉くは婦人でないのみならず、本

誌は家庭で多く讀まるゝことであるから、余はこゝに、喫煙を嗜むるゝ男子諸君に向つて、禁煙のおすゝめをし、はたかゝる人を夫に持たれたる夫人に向つて、このすゝめを其良人にせられんことを望むのである。而して、余は十五年以來の喫煙の習慣を、昨年八月三十日を以て、全く廢した事を述べて置く。

喫煙の害は既に言ふに及ばない。殊に少年に於て此害の甚しい事は、既に我が國に於ても、法律を以て禁止したのである。一般人間の心身に及ぼす危害を數へて見ると、第一、齒を弱くし、肢體を乾燥ならしめ、顔色を蒼白ならしめ、次に記憶力を減じ、眼力を弱くし、胸部、頭腦に血液を上騰させ、従つて頭痛を惹起し又咳嗽を催させるなどいふ事である。これは單に、喫煙者一個人に

留まる健康上の害であるが、其社會上の害に至つては、随分甚しいといふのは、先づ失火の多くは烟草の火から出るので分る。有名な名古屋の東陽館は、三年かゝつて出来上つた立派な建築だつた相だが、然も巻烟草の吸殻から、三時間の間に烏有になつたといふ話。其他東京でも、哲學館がやけ、獨逸協會が焼けた其原因も多分同じことだつたといふ事だ。自分が喫する爲めに、自分の身體を害するのは、致し方がないとしても、夫が爲めに、此様に社會上に害を來すといふ事になつて見ると頗る考ふべきことであると思ふ。其他に言つて見れば煙草を喫む事は、甚だ不潔だ、次に多くの喫まぬ人に迷惑を感じさせる。殊に馬車の中、瀛車の中などで、自分が喫んで居つた時は夫程にも思はなかつたが、さて己めてからは、

甚しく夫が感じられるのである。

次に喫煙は多くの時間を徒費する。喫煙の習慣がつくと、何をするにも、先づ一服といふことになり、一服が一服に留まらないで、二服三服四服五服と無闇にふかし始める。だから仕事の間に一服やつて、夫で精神を刺戟して、考を新らしくするといふことは、一寸困難な話である。

而も之等の害は、多くの代價を要するのである。多い人で月々二三十圓、少くつても二三圓は必ず費やす。之程の代價を拂つて迄も、如上の損害を買はうといふのは、考へて見ると、抑分らぬ次第である。

煙草の効能はといふと、醫者の言に依ると、健康の上につきては全く無益有害な計りだとのこと夫かといつて口に別段甘いといふ譯のものではな

い、たい習慣上、口舌、咽喉に當る刺戟が快樂

に感ずる様になつた計りだ、煙草をのまないとい

手持無沙汰になつて、人と話などするに困るとい

ふけれども、夫は眞の口實ばかり、論より證據、

自分は決して、そうは感じないのである。

か様な次第であるから、自分は是非禁煙を勧め

たい。勿論多くの喫煙家は、己める事が出来れば

己めたいが、どうも、多年の習慣上、己められ

ないといふ。然し、夫は意志の弱いと申すもので

自分の經驗に依ると、僅かに二三日の辛抱だ、夫

も飯を食はないで居るとは違ふ。煙草を喫みたく

なれば、何か仕事をやれば夫で氣が紛れる 二三

日こんな風になると、一週間は譯なしに過ぎる、

一週間過ぐれば、もう此方のものだ。自分のため

社會のため。はた子供のためだ。多くは子供が家

庭で父の喫ひのを見る所から始める事になる。

故矢田部博士は有名な喫煙家であつたが、博士

の禁煙談は、こうだつた『已に克つといふことは

亦一の快樂だ、喫みたいのを堪えて 今日も一日

過ごしたとなると、何となく愉快だ、僕は此愉快

の情を以て、喫煙の快樂に代へて、夫で以て遂に

禁煙した、然し、とても、堪へられぬ時は仕方が

ない茶を嚙むだ事もある』

畫家荒木十畝氏は、先づ鼻から煙を出すことを

已めてたい煙を口から吐き出す事にして、漸次已

めるに至つたといつて居る。

自分は、だゞ、無闇に、我慢して、全く禁止し

終つた。そうして今では、月に三圓の煙草代は、

子供の教育費として 缺かさず、貯蓄してやるこ

とにして居る。

年の始めといふと、物を始めるにも都合がよい
と思つて明治三十七年の始めに於て、此事を喫煙
される方々にあすゝめするのである。

初春

雨　　峰

(一)

うれしき春の來りたる

今日のよろこびかぎりなし

軒端にうたふ鶯の

聲もたのしくさこゆるは

いくちよろづの大御世を

ことばく淨き音色かや

(二)

いぶせき賤の伏屋にも

ちさき旭の御旗さえ

ふと、とあねの顔色に

てりさすかげもうつくしく

富士のねは空たかく

白妙の色えめるなり

(三)

門の小川の流さえ

ふしおもしろく歌ふなり

こゝにも春の光あり

新まりたるわが家は

いかに尊き姿ぞや

このしづまりし小村里

(四)

きたれわが友今日の日に

たのしく富士のねのもとに